

「神のみこころに従う成長の秘訣」

本題は、2011年9月5日から開催されたACF夏合宿の開会礼拝で取り上げさせていただいたものです。「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つ在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし。(ヨハネ 12:14)」これは、三浦綾子著の『塩苺峠』において、「犠牲」というテーマが展開されていくなかで、中心的な聖句となったものです。

北海道の旭川から札幌に向かう列車が、急坂の塩苺峠に差し掛かった際に、最後尾の客車の連結が外れました。その客車に乗っていた主人公である鉄道員「信夫」は、手動ブレーキを操作しましたが客車が完全に止まらず、神に祈り勇気を振り絞って、自らの身体を客車の車輪の下敷きにさせて、満員の乗客を救って殉死をしました。実は、何十年間も結婚を夢に見ていた「ふじ子」が、終点の札幌に待っていて、結納を交わす大切な日でした。

1. 自分の人生を神に捧げるときは、自分の思いを捨て、神のみこころに従う勇気がいる

イエスがゲッセマネで、十字架の死を選びとるときも、自分の願いを壮絶な苦しみを味わいながら捨て、神の道に進む勇気ある祈りをしました。「父よ。みこころならば、この杯をわたしから、取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

2. 神の備える計画、あなたを導こうとする人生は、人知をはるかに超える

誰も、何十年も夢に見て、そのために努力してきたことを止め、違う道に進む決意をすることは簡単なことではありません。人は、今まで努力してきた過去や経歴を振り返り、それらに固執しますが、神は、人知をはるかに超えた未来を指し示すことがあります。さらに、人にとって神のみこころに従う決心をすることが難しいのは、これは神の計画だったとわかるのは、神の助けをいただいて艱難を何度も乗り越えて、はるか後になるからです。

3. 日常の生活のなかで、聖霊の干渉を感じる

熱心に祈り、信仰をもち続けて努力すれば、神のみこころがわかるとはいえません。モーセの召命、マリヤの受胎告知、12弟子への招き、それは日常生活のひとつでした。わたしたちの日常生活なかで、聖書の言葉や、人との会話、あるいは物事がうまくいかないことを通して、聖霊から働きかけがあり、心が促されるときがあります。その時、わたしたちからも、心の中で神に語りかけましょう。そのような日常生活を過ごしているときに、あなたの未来に大きな転機となる「神のみこころ」を示される「時」があります。その「時」は、弟子たちのように、今やっていることを止め、これは神の計画なのかをよく祈り、熟慮しましょう。その「時」、「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」と祈れる勇気をもちましょう。